

北海道情報大学学内報



(咲き薫る桜花 大学横で)

● 目 次 ●

平成12年度新入生合宿研修を終えて……………2	よろしくお願ひします……………6~11
学生部長 立花峰夫	
中国留学体験記 経営学科4年 東 和史郎…3	主要行事……………12
孫鐘秀博士北海道情報大学	
名誉学位記 授与式挙行 ……4~5	編集後記……………12

発行・北海道情報大学  
 〒069-8585 江別市西野幌59-2 TEL011-385-4411 FAX011-384-0134



## 平成12年度新入生合宿研修を終えて

学生部長 立花峰夫

去る4月10日・11日の両日、本学講堂と定山溪温泉のホテルを会場として、平成12年度新入生合宿研修が開催された。1日目の午後1時、本学講堂に集合したのは、3日前に入学式を終えたばかりの経営学科118名・情報学科133名の合計251名。新入生のいずれの顔にも、これから始まる大学生活への期待と不安が現れていた。まだ真新しい匂いを漂わせている松尾記念館の建物もその気持ちを一層高揚させているようだった。

学生委員の平子先生の司会で全体研修は始まったが、はじめに、「合宿研修の意義と学生生活の諸注意」と「初めての大学教育——教養課程の2年間を大切に」という二つのテーマで私がお話した。学生部長と教養主任を兼任している関係でそんな妙な形となったが、新入生はいささか閉口しただろう。引き続き、加藤教務課長から「履修登録の方法と注意事項」について説明があり、さらに、佐藤図書係長からは「図書館の利用」について、中岡電算機委員長からは「実習室の利用」について、それぞれ懇切な説明とアドバイスがあった。熱心に聴講に促されて1時間の予定時間を少しオーバーして全体研修を終えた。

その後、大教室である201教室(経営学科)と202教室(情報学科)とに別れて、「学科別オリエンテーション」が実施された。浜淵経営学科主任と中岡情報学科主任から、これから始まる各学科の特色や方針が示され、併せて専門教育を受ける心構えが話された。また学生委員の坂本先生(経営学科)と外山先生(情報学科)からは、専門科目カリキュラムやゼミなどについてそれぞれ説明があり、新入生の進む専門分野の具体的なイメージが与えられた。

午後2時30分、再び講堂に戻り、体育系クラブ運営委員会の企画による、文化系を含む「クラブ・同好会紹介」が行われた。初めて出会う上級生に対してやや緊張気味であった新入生も、壇上で展開される先輩のクラブ紹介・勧誘のパフォーマンスに、次第に心も和んでいくようであった。ただ、クラブ活動が全般にやや低調であるとの印象は否めず、それ故にますます新入生の積極的な参加が期待されていること実感した。クラブ紹介は1時間足らずで終了した。

その後、出発の準備を整えた新入生は、クラス毎にバス8台に乗り込み、4時に大学を出発。目指すは宿泊地の定山溪温泉。車中は、クラス担任の先生は勿論のこと、隣り合ったクラスメートもまだ十分知らないで、何となくお互いギクシャクした雰囲気。

やがて1時間半余りで到着したのは、「万世閣ホテルミリオオーネ」。今年から利用することになった会場だが、なかなか豪華な雰囲気に思わず皆笑顔。さらに豪華なバイキング方式の夕食に舌鼓を打ち、くつろいだ気持ちで「クラス別ガイダンス」に臨む。自己紹介をきっかけにして、クラスメートと初めて言葉を交わした人も多いはず。また最も気がかりな履習登録や単位や試験のことなど、直接尋ねるうちに、担任の先生の人柄にも触れることとなる。終了後はゆっくり温泉に入り、各部屋で思い思いの時間を過ごした。

翌日は7時すぎ起床。8時30分までに銘々朝食をとる。昨年までとは異なり、2日目の研修は特にないので、出発時刻までの時間をゆったりとリッチに過ごす。午前10時、見送りを受けてホテルをあとにした。車中、研修全般に関するアンケートを記入し、その後は心地よいバスの揺れに誘われて、明日からの大学生活を夢見ることとなった。途中4カ所で希望者を降ろし、予定通りバスは大学に到着し、解散となった。

こうして本年度の新入生合宿研修は無事終了した。新入生の入学直後の疑問や不安に十分応えたかどうかは疑問はあるが、新入生の大学生活のスムーズな始動に少しでも役立てたことと確信している。新入生の諸君には、どうか初心忘れることなく、4年間の大学生活を有意義に過ごされることを心から願っている。

来年度には情報メディア学部の新設が予定されており、今年で8回目を迎えた新入生合宿研修も再検討を余儀なくされている。今後どのような形で実施するのか、今回のアンケートを参考にしながら検討することになるだろう。

ともかくも、実施に当たりご協力頂いた関係者の皆様に深く感謝申し上げたい。



## 中国留学体験記

経営学科 4年 東 和史郎

私は平成10年9月から平成11年12月の間、中国江蘇省にある南京大学に、中国政府奨学金留学生として留学しました。その1年4ヶ月の間、日本では決して経験できない様々な出来事があったのです。

私の留学に向けての準備活動は、奨学金留学の願書提出の準備をするため、留学する年の1月から始まりました。中国語と日本語でそれぞれ願書を書かなければいけないのと、留学先で何を勉強するかといった研究計画書も仕上げなければならず、その2ヶ月間は缶詰状態で、家からほとんど出ることはありませんでした。中国語担当の玉置重俊先生や奥様、当時のゼミ教員の田中祐二先生のご指導もあり、一次試験の書類審査をクリア、4月の東京での二次面接も合格できました。合格通知が自宅に郵送で届いた時、本当に嬉しかったのを覚えています。

9月になり一路中国へ。上海空港に単身降り立ち、そのまま南京へバスで移動、南京市内に無事到着したまではよかったのですが、その降り場でつかまえたタクシ運転手の話す中国語がほとんど聞き取れず、本来ならバス降り場からほど近い留学生宿舎まで2時間もかかってしまい、大変悔しい思いをしました。聞き取りは重要だと玉置先生から念を押されていますが、ここまでとは…。そのようなドタバタした状態で、私の留学生活がスタートしたのです。

南京大学留学生部での中国語の講義は、朝8時から始まり12時まであります。週に1回午後の授業があり、それ以外は基本的には自由時間です。ただ、講義内容自体がハイレベルなので、予習をしなければ講義についていけないのです。また、南京大学の日本語学科に通う中国人学生と相互学習をする日本人留学生も多数いました。なぜならば、中国語の発音は日本人にとっては独学は難しく、やはり中国人にきちんと教わった方がより効果的だからです。私も相互学習のパートナーが複数おり、そのうちの二人とは、今でも手紙やEメールのやりとりをしています。

留学生の宿舎は二人部屋でした。留学期間中、何人かのルームメイトと一緒に過ごしました。今でも連絡を取っているのは、半年間一緒に暮らしたドイツ人ですが、彼は日本の文化にも大変興味があるらしく、彼に日本語を教えたり、ドイツ語を教えてもらったりもしました。宿舎内での共通言語はもちろん中国語なので、ルームメイトとの会話も中国語の勉強のひとつなのです。また、友人同士で自国の料理を作りあったりしたので、イタリア料理やドイツ

料理など、世界各国の料理も堪能できました。

中国に来ている留学生にとって、旅行は最高の余暇の過ごし方であり、思い出作りの手段でもあり、また、学んだ語学を試す絶好の機会なのです。南京大学では1年に1～2回、留学生部主催の小旅行があり、去年の10月1日の国慶節(中国の建国記念日)には上海に行ってきました。テレビを見て知っている方も多いかと思いますが、去年の国慶節はちょうど建国50周年にあたり、上海市内の賑やかさ、人混みと言ったら想像を絶するものがありました。他にも、夏休み中に湖南省の長沙と張家界国立公園にも行ったのですが、湖南省長沙は毛沢東生誕の地で、いろいろな見どころがありました。また張家界で見た景色は、まさに水墨画のような風景でした。他にも北京や西安など、中国は見どころ満載です。私が留学していた1年半で全てを見て回ることはできないでしょう。

長いようで短かった留学生活も終わりに近づき、私が留学生宿舎を出発する前夜、今まで一緒に勉強してきたいろんな国の仲間と一緒に、近くのレストランでパーティーを開きました。当初の予定では20人ほど集まれば…、と思っていたのですが、予想を大きく上回る50人以上が私のために集まり、その夜の友人達との歓談は、私にとっては南京大学での最高の思い出となりました。そして翌日に南京を後にした私は、上海まで見送りに来てくれた友達数人と、上海で最も有名な老舗ホテル「和平飯店」のジャズバーに行きました。そこで聞いた“take five”は今でも耳に残っています。

日本に帰ってきて、はや半年近くが経ったのですが、今こうして中国での貴重な生活を振り返ると、日本では決して得ることのできない世界各国の異文化とのふれあいや国際感覚が、少しは身についたような気がします。また、国費留学イコール“日本の代表”であることへの責任感、さらに情報大の中でも自費で中国に留学した学生は何人かいたのですが、奨学金を使っている留学が初めてだったので、大学の看板を背負っていることへのプレッシャーもありました。しかし留学を終え、そうした責務を無事に全うしたという満足感を、今後の生活への自信につなげていこうと思っています。



(中央帽子着用しているのが筆者)

# 孫鐘秀博士北海道授与

平成12年5月31日、南京大学において同大学の孫鐘秀博士に対し、本学の名誉学位記を授与いたしました。これは南京大学において、多年にわたる情報工学の研究・教育活動に多大な貢献をなされ、かつ本学と南京大学との国際交流協定の締結に際しその実現に尽力して戴いた功績を顕彰するために授与したものであります。

授与式には、学園より松尾泰理事長、中居理事、本学からは立花教授（学生部長）が出席した。

## 孫鐘秀博士プロフィール

1953～1957	南京大学数学学部 学部生
1957～1963	南京大学数学学部 助手
1963～1978	南京大学数学学部 講師
1978～1984	南京大学コンピュータ科学学部 助教授
1984～現在	南京大学コンピュータ科学学部 教授
1991～現在	中国科学院 院士(日本学術会議会員に相当する) 会員
1965～1967	イギリスICL社(コンピュータ関係) 客員研究員
1979～1981	アメリカ ウィスコンシン大学 客員研究員



(名誉学位記授与)

# 情報大学名誉学位記 式挙行



(慶びの孫鐘秀博士の御家族)  
写真左側が奥様、右側が御息女



(推挙の辞を述べる松尾泰理事長)



(両大学関係者)



(祝福の拍手をする南京大学大学院生)

## よろしくお願ひします

本年4月1日付で、9人の先生が新たに着任されました。簡単なプロフィールや趣味等を含めて戴きながら自己紹介をお願い致しました。(掲載は五十音順)



情報学科教授

井野 智

子どものころから不器用で、母親からはよく「お前はすぐ壊すから人様の大切なものには手を触れるな」といわれた私が、皮肉にも、大学卒業の翌年、建設業では初めてのコンピュータが就職先の会社に導入され、おもに構造関係の業務を担当することとなった。今から40年も昔のことである。皇居造営、東京オリンピック開催、超高層ビル解禁などを間近に控え、大学で習った知識だけでは対応できない仕事がつぎつぎともちこまれた。

そのような仕事の一つに国立代々木屋内体育館がある。世界的に有名な丹下健三、坪井善勝両氏が設計した都内屈指の名建築である。私は、施工会社の一員としてワイヤーと変断面の鉄骨梁で構成される屋根面の形状と構造

の解析を手伝い、構造とデザインのつよい結びつきを学ぶことができた。

高価な割に性能が悪く、機械語によるプログラミングなどを強いられた苦勞が忘れられず、私のコンピュータ嫌いは今もつづいている。このたび、縁あって本学の教員となったが、日進月歩の情報関連技術を教育する大学の教員としてはなほ頼りない存在である。習熟者よりも、初学者にきく方がよく分かることもある。自ら学ぶなかで容易に理解できなかった箇所をとくにいていぬいに教える、そんな講義をしながら、コンピュータという新しい道具が様々な可能性を生み出した実用化当初の実体験と感動を学生に伝えたい。

クラブ活動にも関心がある。目的を同じくする先輩や後輩や教員との活動は、同じキャンパスで学ぶ人たちに共通するよき人格“スクールカラー”を育てるのに有効である。自然環境と充実した施設に恵まれた本学の伝統づくりに役立つクラブ活動を応援することも楽しみである。



情報学科講師

齋藤 健司

出身は山形県の山形市のはずれで、田んぼにかこまれた小さな町で育ちました。子供の

ころから父親につれられて蔵王でスキーをしてきたのでスキー歴だけは長いです。

'91年に山形大学工学部に入学し、大学院から北海道大学大学院工学研究科数理情報工学講座知能情報工学分野に移り今年3月に修了したばかりです。在学中は確率的なネットワークを用いた文献検索システムに関する研究をしてきました。特にBayesian networkと呼ばれる確率的ネットワークに注目して研究を

進めています。これは、確率変数の確率的な関係を有向グラフを用いて表現した計算モデルで、身近なところではWindows Officeのヘルプシステムなどに応用されているようです。

Bayesian networkは情報検索だけでなく、エキスパートシステム、認識診断システム、意思決定理論と組合せてロボットの行動決定の仕組みとして使用されるなど、工学的な多くの場面に応用されています。これからは、人工知能、教育工学などの分野でこれらの技術を用いた研究をしていきたいと考えています。

計算機のOSに関しては、今まで学校でUNIXを使っていたこともありLinuxを愛用しています。現在情報大学の計算機ネットワーク環境を勉強中で、こちらの方面でもお役に

たてるようになりたいと思っています。また、研究でFORTRAN、C、C++、Perl、Javaなどの多くの言語を使ってきたこともありプログラミングには自信があります。

以前から情報化社会という言葉が使われてきましたが、IT産業などの発展はまさにこれからではないかと思えます。このような社会情勢の中にあつて、北海道情報大学という経営と情報を学ぶことができる大学に着任し教育と研究に従事することができることを大変嬉しく思っております。社会人としても、北海道情報大学の職員としても1年生の若輩者ですが、頑張つてまいりますのでよろしくお願いいたします。



教養課程教授

三本木 孝

物理学を職業とするようになって30年を超える年月が過ぎました。この間、国を支える科学技術の重要性が指摘され、技能オリンピックに多くの優勝者が出た時代もあり、もの作りの時代は終わったとの声が大きくなったときもあります。新聞などにも取り上げられるように「理科離れ」の進行は止まることなく、「分数ができない大学生」がベストセラーとなっています。理科離れは、いつきの現象というよりは定着してしまった感があります。高校生も早くから文系と理系に分類され、分数を使った公式にアレルギーを示す“文系”学生も珍しくなくなりました。電子機器・情報機器の生産技術で日本の優位は長く続きましたが、それも過去のものとなりつつあり

ます。これらの現象がたがいに無関係に発生しているとは思えません。

高校生の理科離れは日本に限ったことではありません。教育の効率化を推進するイギリスでは16歳の生徒の中で化学を選択する数はわずか2年間で30%に激減し、また、大学で理系を志願する学生の能力が文系志願の学生に比べ明らかに下回っているとのこと。

高校では物理は人気がありません。特に道内では履修率は減少の一途をたどっています。暗記科目であるとか、内容が日常的ではないとか、数学を多く使うとかの理由があげられています。履修率の減少は高校での教員の配置に影響し、その結果として物理を“暗記科目”にしています。

本学の学生の多くにとって、物理学が「役に立たない」かもしれません。しかし、本来は“暗記科目”の要素が最も少ないはずの物理学を勉強した履歴が高学年になって、あるいは、その後に発酵して「役に立つ」ことを願っています。



情報学科助教授

## 田城 徹 雄

北海道情報大学に通うようになって早二月余り経ちました。情報科学概論の講義を受け持って、よい講義となるよう試行の毎日です。ところで、講義ノートの準備中、世間一般に馬鹿は極めて稀だということに気がきました。

『馬鹿』とは、司馬遷の『史記・李斯列伝』に、『大権を掌握した秦の趙高が二世皇帝胡亥に鹿を献上して、それを馬だと申し立てた。二世皇帝は側付きの臣下に『これは鹿ではないのか』と尋ねると、ある者は口をそろえて、『馬でございます』と答えた。二世皇帝はびっくりして、自分の精神が錯乱したのではないかと心配し、大卜を召し出して占わせた。』と記述された故事に由来します。すなわち、『馬

鹿』とは馬と鹿の見分けがつかない者のことを言い、この様な人は極めて稀です。

これは情報科学で言えばパターン認識の問題です。パターン認識は人間が等しく持つ極めて優れた能力で、感性的認識の領域に属します。この例のようにパターン認識は自明なので、感性は先験的なものとされたこともありましたが、感性の水準は理性の水準によって決定されることがヘーゲルの『精神現象学』によって明らかになりました。学習が必要なのです。感性的認識に先立って馬と鹿を見て言葉で覚えることが必要です。学習は情報メディアの時代でも文字によってなされます。リテラシー（literacy：読み書きできること）が大切なのです。

しかも、感性的認識はその即自性のうちに、限界性と虚偽性を持っています。世界を統べるのは理性です。理性的認識のみが真理への道を拓きます。豊かな感性的認識を育み、『学びて思う』ことによって真理への一続きの道を歩まれることを学生諸君に期待します。



教養課程講師

## 田中 英 夫

まず、自己紹介致しますが、私は中国の上海市生まれの上海市育ちです。1982年に上海外国語大学日本語学部を卒業し、上海財経大学財経研究所に勤務して以後、「日中経済の比較」について研究してきました。

1985年に中国政府派遣の研修生として大阪市立大学商学部で一年間研修した後、一旦帰国致しましたが、1988年に日本政府の国費留学生として再度来日し、大阪市立大学商学部の大学院経営学研究科に進学し、貿易論を専

攻致しました。

1994年に博士（商学）の学位を取得してから、日中経済の現場を知り、理論とのギャップを埋めるべく、専門商社の中国室長として勤務し、貴重な実務経験を豊富に積むことができました。商社には2年間勤務致しましたが、日中経済・語学・文化の比較研究に専念し、日本の大学で「基礎中国語」、「ビジネス中国語」、「中国経済論」などを担当するため、商社を退職し、2000年3月まで、京都大学などで非常勤講師を務めました。

私も来日して、丸15年が経ち、16年目に入ったのですが、本当に、光陰矢の如し、早かったなあと思うけれど、振り返って見れば、日本も中国もすごく色々なことがあって、世の移り変わりが目まぐるしい15年だと思いました。私自身も27年間過ごした上海市から大阪市へ、そして15年近く住んだ大阪市から札



幌市へと徐々に北上していますが、どの都市も私と縁があるようです。大阪市は私の生まれ育ちの故郷—上海市の姉妹関係都市で、札幌市も私の父親の生まれ育ちの故郷—瀋陽市の姉妹関係都市です。本当に奇縁ですね。

話は私の本学着任とその抱負に移りますが、1999年12月28日、本学事務局からの採用決定の朗報に接した際は、本当に驚きもし、望外の喜びもする気持ちでいっぱいでした。まさか西暦2000年を迎えようとする数日前に、このような「天から与えられた好機」に恵まれるとは思ってもいませんでした。中国語では、このような好機を「天時」と言います。

また、中国語では、恵まれた環境で働くことを「天時、地利、人和」（「天の時、地の利、

人の和」）とっており、そして「天時不如地利、地利不如人和」（「天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかず」とも言っています。

私の専攻は現代中国論、現代中国対外経済論、日中経済比較論ですが、天然の美にも恵まれる本学で、人の和を求め、教育と研究に全身全霊を打ち込んで、本学の更なる発展のため、そして日中経済・文化・人的交流の掛け橋となるために尽力したいと思います。

最後に、私の趣味ですが、その一つに野球観賞（阪神ファン）があります。卓球も下手の横好きですので、学内の卓球愛好の教職員や学生らと気分転換のつもりで、友好試合でもしたいのですが・・・。



情報学科講師

谷川 健

私は、この4月で社会に出て20年になります。最初の11年間は、東京で主としてソフトウェア開発の仕事をしていました。放送局用機器の遠隔制御ソフトウェア、半導体工場の生産管理システム等、主として機器制御用のソフトウェアの開発を行ってきました。9年前に、通勤ラッシュがすさまじい東京から自然豊かな北海道に生活の場を移すことになりました。北海道では、本学に隣接する北海道情報技術研究所で、学習情報システムの試作・研究を7年間、通信衛星を使った遠隔学習システムの開発と国際共同実験に関する研究を2年間行ってきました。興味ある研究分野は、分散オブジェクト指向を利用した学習情報の再利用および共有です。そして、この4月から本学の情報学科の教員として、お世話になることになりました。

ご存知のとおり、情報技術の進歩は目を見

張るものがあり、雑誌やホームページ等を見ていると見慣れない言葉が突然出てきて勉強不足を痛感します。学生諸君がこの分野を学ぶことは至難であろうと思いますが、IT革命等の言葉で象徴されるように、情報技術を武器として使いこなすことがビジネスの中心となることは明白であり、この技術を身につけた技術者が多く望まれているのも事実だと思っています。本学に入学したということは、このチャレンジな分野に挑む第一歩です。一方、先生方の努力の結果、本年から学生全員にメールアドレスが発行され、本学のコンピュータ環境も充実してきたと聞いております。このような時期に、本学で勉学をともにできることは、幸運であると思います。この環境をおおいに生かし、学生諸君と一緒に勉強しながら、この分野の急速な進歩に遅れをとらないよう努力したいと思っています。

最後に趣味の話を少し。私は、北海道に来てからランニングと歩くスキーにはまっています。ほとんど毎日、昼休みにヘッドフォンをつけて大学の周りを走っています。見かけたら声をかけて下さい。勉学や校務等のいろいろな面でお世話になりますので、よろしくお願い致します。



教養課程助教授

野澤 譲治

このたび情報経営学部の助教授に着任し、心理学と教養ゼミナール心理学の担当及び経営学科1年AI組の担任をすることになった野澤譲治です。昨年までは心理学の非常勤講師と翻訳業をしていました。この原稿の紙面を使って、学生の皆さんに何を言ったら良いかと考えてみました。そこで頭に浮かんだのは、コンピュータについての私の考えです。コンピュータは、今では小型化され膝の上或は手のひらにのりものできていますが、私が大学に入学した頃はコンピュータは一人の人間の大きさよりも大きいものでした。その大きさにもかかわらず、その性能は現在のラップトップのパソコンの性能にも及ばなかったものでした。そのコンピュータが段々高性能化、小型化しています。現在まで続いているこの高性能化、小型化の傾向はこれからも続くようですし、最近などは並列コンピュータ、量子コンピュータといって、原子を複数個集めて、1台のコンピュータを作るというプロジェクトや生物コンピュータ、果てはランダムコン

ピュータというような確率変数を扱うコンピュータまで考案されるような時代になってきました。

私はコンピュータの専門家ではなく、コンピュータの原理については素人ですが、コンピュータの力、我々の知的生産のアシスタントとしてのコンピュータの力には、これまで長年の間、その恩恵を受けてきましたし、これからもコンピュータのない知的生産は考えられません。その経験を考えると、本年、本学に入学された新入生の皆さんには、この大学在学中に色々な方面でコンピュータを使うことに慣れてもらえたらと思っています。というのは、この大学には豊富なコンピュータの設備がありますし、それを活用することが新入生の皆さんの将来の知的生産活動を促進させると考えるからです。私自身、アメリカやカナダの留学で学んだ心理学、確率/統計、英語以上に一番利用度の大きい知識といえば、やはりコンピュータを使うことに慣れたということだろうと思います。現在、私の自宅には2台のコンピュータがありますが、最初に購入したのはマッキントッシュLC575で、カナダの大学内の書店で購入しました。その当時プリンター付で\$3200(カナダドル)で日本円に換算すると約27万円でしたが、これは私の人生の中で最良の投資の一つと考えています。



教養課程教授

吉田 迪弘

先に退任された金澤 甫先生の後任で、生物学を担当します。専門分野は細胞遺伝学で、前任の北大では主として哺乳類の染色体に関する研究をしてきました。言うまでもなく、染色体はDNAより成っていて、昨今話題の「ゲ

ノム」を構成しております。私たちヒトでは46本の染色体数を持っていますが、他の動物では、例えば、ネコは38本、イヌは78本と異なっています。ゲノム解析は、全ての染色体のDNAの塩基配列を決めようとするものですが、46本のヒトの染色体には、母親由来の23本と父親由来23本が含まれてますので、実際には23本の染色体について分析が行われます。これら23本の個々の染色体に含まれるDNAの塩基をそれぞれ決めることが、ゲノム解析と言います。遺伝子はDNAの塩基配列そのものですから、ゲノム解析は遺伝情報の解読に

なる訳ですし、生命の設計図の解析ともなるわけです。したがって、ゲノム情報がバイオ産業や遺伝子治療など実社会に応用、利用できるものとして注目されており、さらに、ゲノムをもとに生命現象を統合的、体系的に解明しようとするゲノム科学という新たな分野が開けてきております。

また、現代はバイオの時代とも言われており、遺伝子工学を初めとする新しいバイオテクノロジーが次々と開発され、例えば、それらを利用してクローン牛や遺伝子組換え植物が作られ、我々の日常の食物にまで入り込んでいます。また、ゲノム科学を推進する手法の発

展により、生命科学の世紀ともいわれる21世紀への基盤が整いつつあります。ゲノムには30数億年という生物の進化の歴史が刻まれております。これらゲノム解析から生じる膨大なデータの中から、いかに新しい事実やルールを見出していくか重要であり、ゲノム科学は基本的には遺伝情報という情報を扱う情報科学でもあるわけです。今後、生物の種々の生命現象がコンピュータ上でシミュレーションされてくると思われ、本学における基礎的ならびに応用的な情報科学の発展に大いに期待しております。



教養課程教授

若林久二

私達は今、時代を先取りするIT革命の真っ只中にあり、本学は明日に向かってその担い手として大きな期待と責務に立たされていますが、そのスピードは驚くほど速く、ともするとコンピュータによる技術革新の進歩のみが独り歩きし、そこには人間が永年の経験から築き上げてきた熟練工といわれる匠の技がコンピュータに奪われようとしている現実を見るにつけ、近い将来のことを考えるとどこまで人間と技術革新の関係がバランスを保ちながら推移していくか想像がつかない昨今です。しかし人間の成しうる特権は、みずみずしい感性による<創造性>を身に付けることであり、常に優位性を保ちながら進んでいかなければなりません。どんな職業に就くにしても、人間優位の心理は変りはないと思います。私自身大学を卒業してすぐいすゞ自動車株式会社に就職し、車の設計デザインを担当した後、

貝印株式会社に転職し、生活用品の商品開発を担当、計30数年をものづくり一筋にクリエイトの仕事に携わってまいりました。

そのあと、ものづくりから人づくりへと方向転換、札幌市立高等専門学校において6年間の教職を勤め、この4月より縁あって本学に赴任してまいりました。既に3ヶ月目に入りましたが1つ感じたことがあります。唐突な話になりますが、廊下をすれ違う学生達が挨拶をしないことです。私から声を掛けようとしても知らぬふりをする学生が多いのは本学だけなのでしょう。例えば企業訪問したとき、社員から「いらっしやいませ」の一言が会社のイメージアップに繋がります。また高専の学生はすれ違うたびに「こんにちは」でした。ただそれだけのことですが1日爽やかな気分です。大学生に対して「挨拶をしましょう」などと言いたくはありませんが、「あいさつ」は人間関係を育む基本です。黙って見過ごす訳にもいきませんのでこの場をお借りして書かせていただきました。些細なことでも改善したいことは1つずつ提案していく気風をつくっていくのも勉強以前に大切なことではないかと私は思います。

## ◆◆ 教職員の動向 ◆◆

☆ 大 学 ☆

## ◇教員人事◇

採用(7月1日付)

教授 石井 詩都夫

## ◆◆ 4月～6月主要行事 ◆◆

☆ 大 学 ☆

4月5日(水) 教授会

7日(金) 入学式

(入学者 経営学科 117名  
情報学科 133名  
大学院 12名)

5月12日(金) 教授会

6月9日(金) 教授会

☆ 通信教育部 ☆

4月14日(金) 入学式

4月17日(月) メディア授業開始

6月2日(金) 前期地方スクーリング(1)

～4日(日) (大阪・福岡)

6月9日(金) ♪ (全国)

～11日(日)

6月10日(土) ♪ (静岡)

～12日(月)

6月16日(金) ♪ (札幌)

～18日(日)

6月23日(金) 前期地方スクーリング(2)

～25日(日) (全国)

6月24日(土) ♪ (名古屋)

～26日(月)

6月30日(金) ♪ (札幌・名古屋)

～7月2日(日) (大阪・福岡)

6月26日(月) 前期レポート提出期間

～7月3日(月)

## ◆◆ 広報活動 ◆◆

\* 高校訪問 \*

北海道、東北北部3県及び関東圏の一部

\* 進学相談会参加 \*

5月24日(水) 札幌、旭川、北見、釧路、帯広、  
～6月20日(火) 函館、室蘭、秋田、盛岡、青森、  
八戸、新潟、仙台、山形、福島、  
郡山、宇都宮

\* 高校教員対象説明会 \*

6月16日(金) 本学会場

6月20日(火) 旭川、北見、釧路、帯広、函館

～27日(火) 各地方会場

\* 校内ガイダンス \*

・苫小牧工業高校 ・芽室高校 ・斜里高校  
・札幌新陽高校 ・江差高校 ・釧路北高校  
・白樺学園高校 ・岩見沢緑陵高校

## ◆◆ 主な来校者 ◆◆

4月28日(金) 財団法人国際協力センター 2名

5月10日(水) 北海道人事委員会 2名

5月22日(月) 白樺学園高校 教員 2名

6月6日(火) 日本私立学校振興・共済事業団 2名

6月9日(金) 苫前商業高校 教員 1名

生徒 1名

6月15日(木) 石狩高校上級学校見学会御一行

6月15日(木) 北海道地区国立学校

事務情報化推進協議会 13名

6月30日(金) 札幌平岡高校PTA見学会御一行

6月30日(金) 豊浦高校 教員 1名

## 編集後記

今年は開学の時を除くと、これまでで一番多い9名の教員が4月に着任されました。今回の学内報では、新任の先生全員に、恒例ではありますが着任のご挨拶をお願いいたしました。教職員間の相互理解の一助になって戴ければ幸いです。ところで、今は故人となりました、映画評論家の淀川長治氏は生前一日1本の映画を見続けていたそうであります。本学図書館の映画も150タイトルを超えました。卒業までに一日1本見てもらう程タイトル数はまだありませんが、授業のあいまに、少しでも淀川氏に近づけるよう挑戦してみませんか。(S)

## 北海道情報大学学内報

「ななかまど」第17号

発行日 平成12年7月1日

発行 北海道情報大学

編集 学内報編集委員会